経済理論における哲学と科学

渡植彦太郎

我国の学界には左右田喜一郎博士の経済哲学提唱以来、経済哲学に一つの伝統が出来ている。それは新カント学派の哲学に依拠するという伝統である。曾て赤松博士はこれに対抗してヘーゲル哲学の立場から経済哲学を説いたが、これも新カント学派的経済哲学への批判としてであつて、その提唱される総合弁証法が経済哲学として持つ意義は到底前者のそれに及び難いといつてよい。[1] しかも、この赤松博士のヘーゲル的経済哲学を含めて、我国の伝統的経済哲学はその一時の隆盛にもかかわらず、それが直接経済学の進展に資すること少く、寧ろこれを害するところさえあるとされて、現在では我国の第一線で活動している経済学者達は、最早これに多くの関心を持たなくなつて来ている。これと逆に、マルクス主義においては、弁証法的唯物論が伝統の経済哲学に代つて、経済哲学として大きな意義を持ちつつある。[2] 元来弁証法的唯物論はマルクス主義全般の基礎としての哲学であつて、これを殊更経済哲学の名を以て呼ぶことに若干の疑問がある。しかし、マルクス主義の経済理論自体は、特に弁証法的唯物論の立場を主張しない場合でも、その十分の把握を欠いては理解し難いとの意味では、マルクス主義の経済哲学として、これを論ずることは必ずしも不当ではないともいえる。この意味において、今日経済哲学を語るについては弁証法的唯物論を逸することは許されないであろう。しかも、同じ哲学といつても伝統の経済哲学がカント的観念論である点では、二者は全く相対立する関係にある。

私は以下、観念論特に先験哲学としての伝統の経済哲学と弁証法的唯物論としての経済哲学とが、それぞれ経済理論に対して持つ意義を訊ねることを通じて、経済理論そのものにおける哲学と科学との関係を少しく考察して見たいと思う。

（一）

今日では哲学と科学とは全くその立場を異にする学問の領域であるとするのが通念となつている。[3] 没価値性の理論で我国でも有名になつたマックス・ウェーバーが経験科学の立場では価値判断を拒否し、価値判断は哲学の領域に属するとしたことを我国の社会科学者の多くはこれを鵜呑みにしているが、ウェーバーが経験科学の立場で価値判断を拒否したのは、それによつて科学的認識の客観性を確保するために哲学に対しては認識の客観性を問題にしていない如くであるが、ウェーバー自身がその科学的認識の論理において多くを負うところの西南独乙学派の哲学は、決して哲学の認識に客観性を要求していない訳でないことを見逃してはなるまい。認識の客観性を経験科学にのみ独占せしめることは少くともこの立場の哲学にとつては堪え難いことで、それでは哲学は学問ではなくして信仰的ドグマに堕して仕舞うことになる。即ち新カント派の哲学が新しい批判主義によつて形而上学に陥ることを避けた苦心は全く水泡に帰することになる。たしかにこの哲学は事実に対する認識の客観性を要求はしない。しかも妥当するものとしての認識の客観性を主張することは断じて譲歩しない。[4]

この哲学の立場からは、哲学と経験科学とはその認識の客観性の有無について相違があるのではなく、その認識の意義に相違があつたのである。その

結果として、哲学と経験科学とは、その認識の領域について確然たる区別が認められるに到つたのである。

元々ウェーバーの社会科学の方法論は、経験科学者としての方法論であつて、彼が新カント派の文化科学的認識の立場をリッケルトから継承しているに拘らず、それは認識論としての方法論ではなかつた。我国において一時隆盛を極めた認識論としての経済学方法論が退潮した後において尚ウェーバーの方法論が論じ続けられたのは、一面マルクス主義との対決という意味もありはしたが、他面、それが認識論としての方法論でなかつたためでもある。左右田博士のごときはウェーバーを社会科学者として高く評価していたが、その経済哲学において彼れに触れるところ少なかつたのもそれに依るといえる。

これを要するに、我国の伝統的経済哲学は前記の新カント派的哲学を背景として出発したものであつたが故に、当初からその経済哲学としての立場は経験科学としての経済学とはその認識の領域を異にすることはその前提となつていた。この点を更に明かにするためにこの経済哲学の伝統の創始者ともいえる左右田博士の学説について少しく探つて見ることとする。

（二）

左右田博士は、本来経済学者として、その学問的思索を出発させたことは、その卒業論文であつて後に単行本として刊行された「信用証券貨幣論」によつてこれをうかがうことが出来る。[5] 当時博士は既にジムメルの「貨幣哲学」から学ぶところ多かつたとはいえ、その哲学を学びとるというよりも、その形式社会学に由来する社会心理学的分析から学ぶところが多かつたといえる。[6] 少くともそれはジムメルが影響を蒙るとこがあつた新カント派的哲学から学んだとは思われない。貨幣を経済価値の客観的表章と解して、その独自の貨幣中心論的経済観を打ち出した時、貨幣を寧ろプラトン的なイデーとさえ考えた。当時貨幣理論において金属説と名目説とが相対立して論ぜられ、クナップの貨幣国定説がもつとも斬新なる学説として迎えられていたのに対して、一学生の卒業論文においてこれ等の諸説を超えて、貨幣を以て経済価値の客観的表章としてとらえたことはまことに驚嘆す可き独創性を示すものであつた。博士の貨幣理論は単なる貨幣の技術論でなく、本格的な経済価値論として、古典学派の客観価値説ともオーストリア学派の主観価値説とも異る立場において経済価値の客観性を追及してプラトン的イデーとしての貨幣にこれを求めた。勿論博士はこの場合尚自己の立場を観念論哲学として自覚していた訳ではなく、経済学者として、経済価値の本質を追及している中に、一般経済学者の経験主義（経験科学者の立場に非ず）にあきたらず、識らずして哲学的思索に駆られたといつてよい。勿論博士は資本主義経済組織をもつとも進歩した経済制度として受け入れ、未だ、資本主義がやがて没落して、別個の経済体制に変化するというが如き予想の下にその論を立てたのではなかつた。当時尚その師たる福田博士すらマルクス経済学の本格的研究をうち出さず、当時の日本の社会主義者達のマルクス経済学研究も幼稚な段階を脱していなかつたことを思えば、[7] 博士がマルクス経済理論に通ぜず、況んやその弁証法的唯物論を解するところなかつたことは責められない。

兎に角博士はこのような学問的経歴を負つて独乙にわたり、そこで本格的な新カント学派哲学の洗礼を受け、その貨幣中心論を軸とする経済学方法論を展開したのが、彼地で発表した「貨幣と価値」並に「経済法則の論理的性質」であつた。前者は、前著「信用証券貨幣論」をエラボレイトすると共に貨幣理論から経済価値論にその重心が移動していることはその両著の書名の相違からも推察出来る。

後者即ち「経済法則の論理的性質」は更に経済学の法則についての認識論的批判であり、今回はハッキリと新カント派的哲学の立場に立つている。前著の貨幣中心論的見解が捨て去られたのではないが、今や博士は経済学者としての立場からでなく、明かに哲学者として経済学の認識に対する批判に及んでいるという立場の推移が認められる。したがつて「貨幣と価値」は経済学者としての博士と哲学者としての博士の過渡の時代を示す著作と見ることも出来る。しかも、このことが後に到つて、経済学者としての先験心理学的

方法と、認識論家としての論理主義の立場の相違として現われ、博士はこの二者の結付のために大いに苦慮するところがあつたに拘わらず、それは必ずしも成功しなかつたことは後述の如くであるが、[8] これは博士一個の問題でなく、総じてカント哲学の二元論の宿命であるといつてよい。

それはとにかく、認識論家としての博士はその師リッケルトの先験論理学の方法に従つて、当時慣行の理論経済学の認識方法に批判を加えると共に、所謂経済法則についてその論理的性質を吟味した。少くとも当時の自然科学をモデルとするなら、科学的認識とは、普遍的な法則を見出すことを以てその究極の目的としていた。当時の経済学もこのモデルに倣つていたことは当然であつた。しかも、経済学において、自然科学におけると同様な法則を見出すことが出来たであろうか。曰くグレッシャムの法則、地代の法則、人口の法則、限界効用逓減の法則等々、法則の名を以て呼ばれるものが数多く存したことは事実であるが、この中比較的法則らしきものは自然科学の法則の経済現象への適用に過ぎず、他はいわば経験的な傾向性に過ぎないのであつた。このような経済法則では到底自然科学の法則と同一視する訳には行かない。一方当時漸くヴィデルバント、リッケルト等によつて提唱され来つた史学を中核とする文化科学は、法則定立を目的とせず個性記述を任とするものであるから、法則を求める理論経済学にはその儘では何のたすけにもならない。リッケルト自身が経済学を自然科学と文化科学との中間領域とする曖昧な見解しか持つていない。[9] 博士はこれにあきたらず、理論経済学が広い意味で文化科学に属し乍ら尚或る種の法則を求め得る科学であることを明かにしようとした。勿論それにはリッケルトの範疇論に対する改修を施す丈の用意をし乍ら、文化現象としての経済現象に一種の法則を認めようとする試みをなした。即ちかかる経済法則は飽く迄も自然科学の法則のような厳密性を持つものではなく、経験的傾向性に外ならぬものとする。しかるに理論経済学者は、かかる経験的傾向性に他ならぬものを自然科学の法則性と同一視し、或は、元来自然科学の法則であるものが経済現象に適用されているものを、個有の経済法則ととり違えているというのが博士の彼等に対する批判であつた。それは彼等がそもそも法則の論理性を弁えないからであるというのであつた。そこで博士はカント認識論の立場から自然科学の法則の論理性を明かにすると共にこれと根本的に異る経験的傾向性に外ならぬ経済法則というものを明かにする必要があつた。これが博士の「経済法則の論理的性質」を貫く中心的な意図であつた。

博士が独乙より帰朝後我国の学界に大きな波紋を生ぜしめた経済哲学の提唱は、以上の如き博士の学問的経歴を背景とするものであつた。しかもこれを受入れた我国の学界では、経済学者は殆ど全く哲学的素養を欠き、哲学者は個別科学、特に経済学に不案内であつたが故に、その提唱に応ずるの用意を欠いていた。

加うるに十年に渉る博士の滞独生活は博士の思考方法を全く独乙語化していた為に、その綴る日本語の文章は、大きくその理解を妨げた。それは学界に対する理解されざる衝撃を与えたといつてよい。

（三）

博士の在独中の著書特に「経済法則の論理的性質」中には経済法則と呼ばれて来たものに対する吟味の他に、経済学の根本概念の形成に対する批判も亦含まれていたが、この面を強く打ち出したのが帰朝後の諸論文であつた。即ち「カント認識論と純理経済学」[10] を皮切として次々に発表した諸論文において、日本の代表的経済学者の著書について、その根本概念の形成方法が如何に不用意な経験主義に堕しているかを痛烈に批判した。その批判の立場は勿論新カント派的認識論に依拠するものであつた。しかも実情は日本の経済学者が哲学を解せざるが故にかかる誤を犯しているのではなく、経済学者としての反省が不足しているが為であつたのであるが、かかる反省は哲学殊に批判哲学の立場に立つことなくしては不可能であるという印象を読者に与えたことは否定出来ない。博士自身が経済学の嚮導概念としてとり上げた貨幣概念のごときは、既に述べたごとく、博士が尚批判哲学に接しない以前の経済学者としてこれをとらえたものであり、博士もしばしばその嚮導概念が貨幣

概念でなくてはならぬ訳はなく、資本でも労働でもよいといつている位である。何を経済学の嚮導概念として択ぶかは経験科学者として経済学者の見識にかかるものであつて、必ずしも批判哲学にこれを負う必要はない。したがつて、博士は、漫然と欲望に出発して嚮導概念の規定なく恣意的にこれを経済的欲望に限定し、更に経済行為に及ぶ所の当時慣行の経済学の根本概念の形成の仕方を難じたのがその真意であつた。ところが博士は一方において経済学を文化科学と規定し、その認識目的を経済的文化価値としたことから、博士は経済学の認識目的を貨幣概念とするものと誤解され、その貨幣中心論を以て貨幣中心主義とする曲解すら赤松博士の如き勝れた経済学者によつて抱かれる結果を生んだ。[11] 勿論かかる誤解に対して再三にわたり博士は弁ずるところがあつたが、かかる誤解は、必ずしも誤解者の責任のみに帰し難い節もないではない。というのは、それは元来カント認識論に含まれていた先験心理学的方法と先験論理学的方法の二元性に起因するところあるからである。例えばリッケルトもその著「認識の対象」を初版では先験心理学的方法により、版を重ねるに及んで次第に先験論理学的方法に転じた位である。[12]

しかもその一方に徹底出来ない所にカント哲学の二元性が存するのであるが、既に述べたごとく、博士が経済学の嚮導概念として貨幣概念に到達したのは先験心理学的方法によるものであり、経済学の認識目的として経済的文化価値を規定したのは先験論理学的方法によるものであつた。一層くだいていえば、前者は経験科学者としてなし得るところであり、後者は認識論家の立場によつて始めて果し得ることである。博士が日本の経済学者の根本概念の形成の手法を批判した時、その先験心理学的立場は既に背後に退いて、認識論家として、先験論理学の立場に立つていたために、自ら如何にしてその嚮導概念としての貨幣概念を択び取つたかについて、十分に説くところなく、経済的文化価値を認識目的とすることにより、直にその嚮導概念としての貨幣概念が得られるがごとき印象を読者に与えたことは事実であつた。更に認識目的としての経済的文化価値は飽く迄も先験的な論理的形成であるのに対して、嚮導概念としての貨幣概念は、認識目的としての経済的文化価値の制約としては内容であるが、経済学の根本概念の形成に当つては、形式的な役目を果すものであるから、カントの先験主義哲学に精進しない経済学者がこの両者を混同するに到つたことは止む得ないところであつたともいえる。

但し、博士自身は、先験心理学の立場が経験科学者としては、寧ろ必要であることを十分認めて居り、したがつて又その嚮導概念としての貨幣概念と認識目的としての経済的文化価値とは一応形式と内容として混同する可きではないが、「尚両者の間に何等の交通がなかる可からず」として、深く思索した結果の見出した論理がその「極限概念の哲学」であつた。[13]

その極限という概念は博士が数学からヒントを得たものであるが、カント的先験性を飽く迄も論理的に規定しようとした試みであつた。例えば円周は多角形の極限として考えられる限り極限概念であるが、円周そのものが常に極限概念である訳ではない。したがつて極限概念は飽く迄も形式であつて、一つの方向の到達点を示す極限に他ならない。この極限概念を通じて、先験心理学のアープリオリと先験論理学のアープリオリの交通を計つた訳であるが、これが果して十分成功を収め得たか否かは依然として残る問題である。私見によれば、カント哲学の立場を守る限りその二元性を脱却することは至難ではないかと思う。[14] その結果として、哲学の立場と経験科学の立場とは相交ることなき平行線として終始することになるのではないかと思う。

以上は左右田学説の展開のあとを辿り乍ら先験哲学に依拠する経済哲学が、その論理主義を徹底する限り、経験科学としての経済学から遊離する宿命を担うものであることを明かにしたのである。かかる伝統を負う我国の経済哲学は、博士の没後その高弟であつた杉村広蔵博士によつて受け継がれ、カール・メンガーの限界効用説に結びつけて、「経済性原理」を以て経済的文化価値の内在化をはかつたけれども、それは多くをもたらしたとはいえない。[15]

杉村博士は、先験哲学に関する限り専門哲学者以上の理解力を持ち、経済学についてもその師に勝る程精通していたに拘わらず、その師が当初に持つていた程の経済学者としての体験と悩みを持たず、始から哲学の立場に立つて経済学に臨んだということが、その有能さに比して、経済学に資するとこ

ろ少かつた所以であろうか。

その他の経済哲学の論者に到つては、経済学者としての独創に乏しく、且つ哲学にも精通していなかつたが故に、その論議の盛であつたにかかわらず我国の経済学に寄与するところなく、何時とはなく学界から忘れ去られる運命を辿つた。其の後、前述の如くマックスウェーバーの没価値性の理論が多く論議されたが、それは、一つはマルクス主義の実践性に対する対抗する砦とされたに過ぎず、僅かに大塚久雄士の如き真面目な経済史家によつて経験科学方法論として消化されたに止つて、それは何等我国における経済哲学の復興を意味するものではなかつた。

（四）

新カント派哲学に依拠する経済哲学が経験科学の批判という立場に止る以上、経済学がそれによつて何等の寄与を蒙るものでないことは、カント哲学そのものの持つ二元論的宿命に由来するものであつて、これと同様なことが自然科学についてもいえるのである。すなわち、カント哲学の立場からの自然科学認識論は、マールブルグ学派以来数多く行われ、[16] 我国でも田辺元博士、石原純博士等によつて説かれた。[17] その中には専門哲学者の手になるものと竝んで著名な自然科学者によるものも見られる。しかも、その認識論は自然科学者自身の体験と必ずしもマッチせず、カント的認識の理論を借り来るが故に、それによつていささかも自然科学上の業績が促進せしめられることにならない。[18] 況んや哲学者のものに到つては、既に果された自然科学者の業績を跡ずける以上のことは不可能である。

このようにカント的認識論は、哲学や科学の不当な形而上学化を抑制する消極的な役目を果しはするが、積極的には経験科学には何物ももたらし得ない。

この点において、同じくカント哲学の流を汲み独乙理想主義哲学の殿将となつたヘーゲルは、カントの先験哲学を大きく修正して弁証法を編み出すことによつてその二元論を克服しようとした。ヘーゲル哲学は、カントがその批判主義によつて、経験科学から遊離する傾向を示すのと反対に経験科学を悟性の立場として、これを理性の立場である哲学に吸収する傾向を示している。従つて経験科学を哲学化することによつて、その独自の存在をおびやかす危険はある。それが後に到つて自然科学の立場を重ずる唯物論から反撃を蒙るに到らしめた。しかも、ヘーゲル哲学はそれによつて、経験的知識を軽んずるというのではなかつた。寧ろその歴史哲学や法哲学の中にとり入れられた経験的知識の豊富さには驚嘆せしめられるものがある。

ヘーゲル哲学は一面カント哲学の発展とも見られるが又他面、アリストテレス的なギリシャの綜合哲学の復活でもある。哲学は経験科学から一歩退くことでなく、却つてこれを包括しようと企てる。[19] 新カント派哲学が十九世紀中葉以来の目覚しい自然科学の進出と妥協して、その存在を認容しつつ僅かに認識の批判としての地位を哲学のために死守す可く、科学と哲学との二元的領域を劃したのに対して、元来哲学はギリシャ以来の伝統に従えば、否近世に及んでも、人間の知識の綜合であることを目指して来た。ヘーゲルはこの伝統に帰つて哲学におけるこの綜合性を強く打ち出した。したがつてヘーゲルにおける経験的知識の豊富さは、ヘーゲル自身の博識の結果丈でなく、その哲学の要求する帰結でもあつた。その著「エンチクロペディー」の名によつてもこれをうかがうことが出来る。しかもかかる哲学的綜合の試みは、ヘーゲルを最後として、諸経験科学の多岐にわたる発展と共に、観念論哲学者の手によつて企てられることなく、却つて経験科学的立場からの綜合が試みられるに到つた。スペンサー、コムトの如きがその代表者と見ることが出来る。

この人々の哲学は、徹底した唯物論ではないが、さりとて観念論とも異る点がある。即ち経験科学の外部でなく、寧ろその内部から出発して諸科学の綜合を企てる限り、経験科学から遊離することはない。かかる行き方を実証主義と呼んで、その内容からずるずるべつたりに形式に移行することを難じているのが新カント派の批判哲学である。

独りマルクス主義は、経験科学から離脱せずしかも弁証法の論理をヘーゲ

ルから受け継ぐと共に、実証主義と異る道を取りつつ綜合的哲学の立場に立つものと見ることが出来る。

カント哲学の立場では、哲学と経験科学とは全く別個の領域に区別され、認識の客観性を要求し得るものは経験科学丈であつた。

而してかかる認識の客観性の論理的基礎付を提供するのが哲学の任務とされて、その面目を保つた。ヘーゲル哲学の立場では、経験科学は哲学に比してより低度の認識の段階でしかなく、哲学こそその認識の客観性を要求出来る立場にあつた。マルクス主義は又このようなヘーゲルの伝統を受継ぐことによつて出発している。ヘーゲルの場合は、経験科学より哲学が高次の段階にあるが故に科学の哲学化が必然的に生じ、且つその哲学が観念論なるが故に経験科学の成果はたとえ取り入れられても、観念的に解釈し直されることになる。経験科学としてその面目をもつともよく示す自然科学が自然哲学に解消されて仕舞うがごときはその一例である。これでは哲学から独立してその道を歩んで来た自然科学がその方向を逆転して仕舞うことになる。ヘーゲル左派の唯物論化は、一面ヘーゲル哲学の宗教化への反動でもあるが又他面、自然科学的認識からのヘーゲル哲学による知識の観念化への反撥でもある。

フォイエルバッハの唯物論は、当然ヘーゲル哲学の宗教化的側面への反撃でもあつたが、同時にそれは自然科学的認識の立場からのキリスト教そのものの批判でもあつた。[20] マルクスがドイツイデオロギーでヘーゲル左派を批判したのは、このような認識の立場からの宗教批判にあき足りなかつたからである。[21]

このような唯物論は、一つの認識の立場を他の認識の立場に置き換えることを要求するものに過ぎない。マルクスは更に認識そのものの根底をなす物質的なものの改変を要求したのである。しからばこのような認識の立場から実践的変革へとマルクスを転向せしめたものは何であつたか。

マルクスがヘーゲル左派的唯物論から弁証法的唯物論に迄成長したのはライン新聞に関係していた際の経済問題への関心がその起縁をなしたといわれている。この場合の経済問題への関心とは、今迄学び来つた法律、歴史、哲学等とは知識の分野を異にする意味での経済の問題であつたろうか。すなわち今迄とは異つた知識の分野に関心を抱いたのであろうか。恐らくそうではなくして、人間による物質の社会的生産としての現実の経済に関心を持つたのではあるまいか。

マルクス主義はドイツ古典哲学、イギリス古典経済学、フランス社会主義の三者の綜合であるとレーニンが定式化して以来、一つの通説となつている。マルクスが、その後イギリス古典経済学を研究したことは事実であるが、その結果始めてその弁証法的唯物論が成立したのではなく、それに先立つて、マルクスは既に資本主義の経済学を批判する基準としての人間による物質の社会的生産としての経済をつかんでいたのではないか。古典派経済学の研究は彼れの経済理論を磨き上げたには違いない。しかし彼の経済理論はそれに止らず弁証法的唯物論の基底である経済に対して、古典派経済学より更に深い次元でこれを把握していたのではないか。それなればこそ、弁証法的唯物論では経済的なものが同時に物質的なものでもあり得るのではあるまいか。経済的であると同時に物質的なものをとらえ、これを如何に処理するかという点で、単に認識の立場に停滞していた唯物論を実践的な唯物論に迄高めることが出来たのであると解し度い。

（五）

経済と呼ばれる事象が尽く人間による社会的物質の生産に、直接関与しているという見方は一つの俗見に過ぎない。例えば経済学を学ぶことを以て金儲けの手段の研究であるという俗見が一方に存することによつてもそれは明かである。アダム・スミスが国富論を書いた時、個人の私利の追及が同時に国富の増進となるという彼独自の理神論的楽天主義を前提としていたし、又当時の歴史的状勢が或る程度これを裏書するかに見えたのに対して、産業革命の進展は漸く個人企業家の私利の追及が後にJ・A・ホブソンがいつたように「豊穣の中の貧困」を生み出す結果を招くに到つたことは否定出来ない。個人の致富のための活動が真の人間による社会的物質の生産と相伴うもので

ないことは、二十世紀初頭においてこれもアメリカの経済学者ヴェブレンが指摘している通りである。[23] 人間による社会的物質の生産に直接関与しない所謂経済活動を弁護する俗流経済学を学ぶことがマルクスにとつて何等益するところなく、寧ろこれを批判することこそ彼の使命であつた。そのためにリカルドからスミス迄さかのぼつて古典学派経済学を彼が研究した結果、経済とは実に人間による物質の社会的生産であることを確かめることになつたことは疑う可くもない。此処に彼が俗流経済学に対する古典学派経済学の学問的意義を認めた理由もあると思われる。

ところが観念論者は経済をこのように人間による物質の社会的生産として、即ち人間の社会生活の基盤としてとらえることが出来ず、これと既に遊離して仕舞つている個人の私利追及的活動を経済と見做しているのである。人間による物質の社会的生産としての経済が物質的であるというのは、それが形而上学的唯物論におけるごとく、単なる個人の意識の対象としての物質ではないからである。それは社会的生産という行動を通じて取り組むところの実践の対象である。この点が弁証法的唯物論が形而上学的唯物論と根本的に相違する点である。マルクスが一度ヘーゲルの観念論から解放されるに当つて、あれ程心酔したフォイエルバッハに批判的となつたのはこのためである。[23]

ヘーゲルに到つて弁証法が観念論的にせよ自覚されたことはヘーゲル哲学が自然認識でなく、人間の実践としての宗教や歴史を哲学的認識の対象としてハッキリとり上げたからである。ヘーゲル以降宗教史や史学が興隆を見、法学や経済学において、啓蒙的合理主義に対する歴史主義が生れたのもここに由来する。しかしヘーゲルはそのような人間の実践を意識の対象としてしかとり上げ得なかつた。

弁証法的唯物論は、実践を意識の対象としてでなく意識の根底としてとらえたのである。

フォイエルバッハの唯物論はヘーゲルを唯物論化したけれど、その物質は依然として意識の対象でしかない。従つて宗教や形而上学的観念論の虚蒙を発くことは意識の改造を以て足るとの帰結に達する。フロイドにおいて神経症患者が精神分析によつて抑圧を自覚に持ち来すことによつて治療されると相似たものがある。

しかも精神分析においてすら、分析者の施術という実践の媒介を必要とする。意識の改造自体が、その背景に社会的実践を前提しているのである。マルクスがフォイエルバッハの社会的実践を無視した、意識のみの改造に飽きたらなくなつたのは当然である。

（六）

弁証法的唯物論が物質を実践の対象とするのに対して形而上学的唯物論が物質を意識の対象とするとすれば、後者は当然に唯物論の体系化を企てる。弁証法的唯物論はこれに対してそのような企てを志向しない。マルクス、エンゲルスは勿論レーニンも亦哲学体系としての唯物論を説くものではない。その哲学は科学的分析の中に働いているか、或は又観念論哲学との論争において寧ろ断片的に説かれているに過ぎない。エンゲルスが哲学は形式論理と弁証法となるといつた場合、形式論理の体系や弁証法論理の体系を哲学であるといつていうのではあるまい。形式論理学の体系は教科書でしかない。近頃瀕りと見られる弁証法的論理の体系の中に果して唯物弁証法が活きているかについて多大の疑問を持つ。

ヘーゲルは悟性の立場に止る科学を理性の立場から解釈し直してその哲学体系の中に取り入れようとしたが、マルクスは逆に哲学を科学の中に吹き込んで、科学の抽象化を救つたと見ることが出来る。科学が経験の立場から出発するのは当然であるが、経験に止る限りその認識の客観性を保証出来ない。これを確保しようとして先験哲学は観念論に陥つた。

弁証法的唯物論はその客観性の保証として客観的物質を置く。経験的認識はこの客観的物質を模写する限り、又その程度に応じて、客観性が保証されるとする。但しその模写はカントの感性の如き単なる受身のものではない。それは能動的であり、行動実践を媒介とする。カントの認識論においてさえ、その自然認識に実験を重視したのは、カントは観念論者であり乍ら、自然認

識者として、唯物論的立場に立つていたことを示す。自然認識における実験は狭い意味ではあるが行動的実践であるからである。

しかしこのように弁証法的唯物論を行動実践の面から理解することに対して、それは弁証法的唯物論をプラグマチズム化することであるとの反論を受けるかも知れない。私は寧ろマルクス主義が従来プラグマチズムをブルジョア哲学として余りに敵視し過ぎていることに対して却つて不満を感じさえする。たしかにプラグマチズムは、反動的立場からマルクス主義に対する対抗馬として利用されていることは否めない。それはマックス・ウェーバーが利用されているのと相似ている。しかも、対抗馬に利用されていること自体が、プラグマチズムが単なる観念論の域を脱していることを物語るものではないか。

マルクス自身が、ブルジョア経済学を批判し乍らも古典学派経済学の価値を認め、又独乙観念論の伝統を負うことを誇りとしている。

形而上学的唯物論がフランス十八世紀のブルジョア哲学である如く、プラグマチズムも亦十九世紀末から二十世紀初頭へかけてのアメリカ、ブルジョア哲学である。十九世紀になつて尚ブルジョア哲学を説くことが反動的であつたというかも知れないが、十八世紀のフランスと十九世紀の新大陸とは社会状勢や伝統が異る。形而上学的唯物論が既にマルクス主義に止揚されたからといつてこれに寛大であり、プラグマチズムが反動者によつて現在利用されているからといつて、これに苛酷であるのは、党派的戦術としてなら兎も角、理論としては筋が通らぬという感を私は抱く。プラグマチズムはたしかに唯物論ではない。しかし形而上学的唯物論も弁証法的ではない。この両者の何れが弁証法的唯物論と相隔つているかということは俄かに断じ難いと思う。形而上学的観念論を打破して科学的思考を、しかもその実践の面を発展させたパースやデューウィの功積は、形而上学的唯物論が形物上学的観念論からの宗教化を排撃したのに劣らないものがありはしないか。

エンゲルスが哲学を観念論と唯物論との二大陣営にキッパリ区分けした時、観念論と宗教とが如何に強く結びついていたかは、キリスト教的伝統を知らない我々日本人には理解出来ない。唯物論者フォイエルバッハが、その一生を通じて斗つた相手はこの哲学と宗教との結付であつた。[24] その伝統を弁えない我国のマルクス主義者は唯物論即マルクス主義と早合点して唯物論を弁証法化することを怠つているのではないかという疑問を抱かざるを得ない。真実のプロレタリアは、自然発生的に唯物論者である許りでなく、物質の社会的生産に直接従事するが故に、自然発生的にも弁証法的になる。ところがインテリマルクス主義者は行動実践的でないが故に唯物論に停止して弁証法に迄進展することが困難である。このことが彼等をして時に左翼冒険主義に又は公式主義に走らせ、引いてはこの人々の指導下にプロレタリアの実践をすら誤りに陥いらせる結果となる。革命運動もたしかに行動実践ではあるが、観念論者でも政治革命の運動に乗り出すことはある。但しこの場合の実践は行動であつても独走であり、社会実践とはならないのである。

このように弁証法を欠いた唯物論は社会改造の先駆又は一つの捨石とはなり得ても、その儘ではそれ丈の実践力を持ち得ないことを悟らなければならない。それは弁証法的唯物論と絶対に同一視されてはならないものである。

これに対して、プラグマチズムは近代自然科学の論理を行動に地道に結びつけるここによつて観念論的形而上学の非実践性を是正しようとした。但しその実践が結局ブルジョア個人主義に帰着することは否めない。しかしアメリカの建国当時の個人主義はイギリスのブルジョア個人主義その儘ではなかつた。フロンティアに進出した西部開拓者の個人主義的実践は、イギリスの資本主義の展開とともに成長した個人主義の実践とは異るところはある。彼等の多くが自然の脅威やインディアンの暴力或は西部劇で見るような町のボスとも戦つたであろう。しかしそれは近代プロレタリアのように資本主義という社会制度としての抑圧に直接抗した訳ではなかつた。プラグマチズム固有の生物主義はアメリカ人の当時の実践の対象が社会的なものでなく、寧ろ自然的なものであつたことと関連がある。この意味でプラグマチズムにおける人間の環境は生物的環境と大差ないものといえる。従つてデューウィの個体としての人間の生活環境への適応には習慣が大きな役割を果している。し

かもこの習慣は生物の個体の持つ習性のようなもので、これが人間の持つ社会的な習俗とハッキリ区制されていない。[25] 習性に過ぎない習慣ならば個体が環境と直接相互作用をしている間に自然発生的に獲得出来るが、習俗としての習慣となれば人間的な社会生活を営むことなしに育成されない。デューウィは勿論其処に生物に存しない教育の必要を認めているが、彼が教育の問題として重視しているのは、寧ろその習慣を打破して環境を見透す創造的知性の育成であつた。[26] 創造的知性は社会の批判であつて社会によつて育成されるものではない。此処にプラグマチズムの抜け難い個人主義を認めることが出来る。

したがつてプラグマチズムにおいてもつとも警戒しなければならないのはその実践における社会性の欠除である。個体が直接社会を媒介とせず環境と交渉するという点でその習慣にも、その創造的知性にも共に歴史を持ち伝統につながる社会性が見失われる。コンフォースはプラグマチズムの観念論的性格を曝露するに急であるが、[27] その観念論的帰結も所詮はその実践の狭さから生ずるものであつて、その出発点たる生物主義は寧ろ唯物論的であつたのである。

（七）

弁証法的唯物論における実践はプラグマチズムの実践と異り、社会性をとり入れることによつて首尾一貫した唯物論となることが出来た。プラグマチズムはその行動的実践を媒介とすることにより形而上学的唯物論の単なる認識の立場を超えるものを持ち乍らその行動実践の狭さの故に再び観念論的立場への後退を余儀なくされた。

しかし、一方哲学が観念論化するに及んで実践から遊離すると共に、他方実践の要求から生れた近代自然科学は哲学と相背馳する道を歩んだことは近代思想の歴史が教えるところであるが、その傾向は独乙観念論が哲学の主導的立場を執るに及んで愈々顕著なものがあつた。新カント派哲学が自然科学の興隆に抗し得ずこれと妥協して、哲学と科学との二元主義を説いたことは既に述べた。プラグマチズムはイギリス経験論哲学の一つの発展として、再度、その理論の実践化を通じて、哲学と科学との結び付を企てたものであると見られる。

コンフォースはプラグマチズムをアメリカ的ブルジョアの実践の反影としてこれに奉仕するものに過ぎないという。[28] たしかに現今のプラグマチズムにはその傾向なしとはいえない。しかしプラグマチズム哲学の背景さえ欠く単なる科学のための科学は更に卑少な実践の手段と化しつつあることも見逃せない。プラグマチズムがブルジョア民主主義のワク内で或る程度、科学をヒューマニズム化することが出来るのに対して、何等の哲学的背景なき科学の立場は全きエゴイズムの或は兇悪なる目的の手段とされる危険が多く存在する。

これに対して弁証法的唯物論は、その社会的実践を媒介として、哲学と科学とを統一し、学問をして真に人類のための実践の指針たらしめることが出来る。唯物弁証法が哲学の論理であるということはヘーゲルの場合の如く、科学を哲学化することによつて、その実践性を奪うのではなくして、哲学の論理と科学の論理とを統一せしめることによつて、理論を実践化するのである。

これを吾々の経済理論の立場についていうならば、哲学は所謂経済哲学として、科学としての経済理論から遊離するのでなく、経済理論の分析的固定化を救うものとして経済理論そのものの中に活きて働くことになる。例えばマルクスの資本論が単なる科学の理論としては理解し難いものを含むのもそのためである。[29] 従つて又、マルクス主義の経済哲学を、唯物弁証法や史的唯物論に直接言及する文献にのみ求めることは許されないであろう。

すなわち経済理論を離れた経済哲学というものはマルクス主義には無い筈である。この意味において、観念論哲学としての経済哲学に代る可きマルクス主義の経済哲学とは寧ろ観念論的経済哲学の否定において考えられると共に哲学を欠いた科学的経済理論の否定においてその意義が存するといえる。

プラグマチズムも亦前述のごとく、その個有の実践を通じて、科学と哲学との統合を目指すものであつた。此処に今日プラグマチズムにその理論的起

源を持つアメリカ社会心理学の興隆の原因を見出すことが出来る。[30] しかも社会心理学が個人の生きる社会のワクを前提とした個人のパーソナリティの科学であることはそのプラグマチズムに由来する系譜を物語るものではないか。すなわちそれが、個人が生きるところの社会自体を問題としない限り、実は社会心理学自体が真の社会科とはなり得ない。この前提とされている社会自体を問題とするのがマルクス主義の社会理論である。

かくて等しく哲学と科学との統一を企てはしたが、プラグマチズムではなくして弁証法的唯物論丈が尤も勝れた意味における社会理論としての経済理論の哲学なり得る所以である。かかる意味の経済哲学として、それは経済理論を実践化する使命を持つ。

（註）(1) 赤松要　ヘーゲル哲学と経済科学
(2) 梯明秀氏の諸書
(3) 沢瀉久敬　科学と哲学
(4) W. Windelband—Präludien
(5) 左右田喜一郎　信用証券貨幣論
(6) G. Simmel—Philosophie des Geldes
(7) 当時の社会主義者たりし堺枯川・山川均氏もマルクス経済の理解において、福田博士にすら及ばず、未だ河上肇博士がマルクス主義経済学者として登場しない位であつた。
(8) 渡植彦太郎・左右田哲学の展望「理想」三十一年六月号
(9) H. Rickert—Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildlunq
(10) 左右田喜一郎　経済哲学の諸問題
(11) 赤松要　前掲書
(12) H. Rickert—Geg enstand der Erkenntniss
(13) 左右田喜一郎　文化価値と極限概念
(14) 渡植彦太郎　前掲論文
(15) 杉村広蔵　経済哲学の基本問題
(16) P. Natorp—Die logiche Grundlagen der exakten Wissenschaften
(17) 田辺元　科学概論
石原純　自然科学概論
(18) 武谷三男　唯物弁証法の諸問題
(19) Stace—The Philosonhy of Hegel
(20) 城塚登　フォイエルバッハ
(21) マルクス、エンゲルス——ドイツイデオロギー　古在訳
(22) T. Veblen—The Theory of Bnsiness Enterpnise
渡植彦太郎　技術者革命　富山大学経済論集前号
(23) 城塚登　前掲書
(24) 仝
(25) T. Dewey—Human Nature and Conduct
(26) 〃　—Democracy and Education
(27) コンフォース　哲学の擁護
(28) コンフォース　仝
(29) 日本のマルクス主義経済者はマルクス経済論を哲学抜きで理解しようとし、マルクス主義哲学者は経済理論に多く触れない。触れてもその哲学的論理の例証を資本論から引用するに止る。
宇野弘蔵　「資本論と社会主義」
(30) デューウィやミードの哲学が今日の社会心理学の源泉となつている。
T. Dewey—Human Natur and Conduct
G. H. Mead—Self, Mind and Society